ケインズとTRPG ― 竜の金蔵

セッションログ 第2回 ― 継続チャット「竜の金蔵（続き）」より

K＝ケインズ　　G＝GPT　　M＝マスター

M　＝マスター

準備オッケー

K　＝ケインズ

では、開幕だ。

・　・　・

第四景「雨の朝、判ひとつ」

作中4日目、朝。

雨は夜のあいだに強くなっている。エルム亭の屋根を叩く音、宿の前の道はもう泥で、川の音が昨日の倍近く聞こえる。

食堂に最初に下りてきたのは、やはりロウェンだ。目の下に少し隈がある。だが机の上には、昨夜書き上げた**保全覚書**が、乾いた布に挟んで置かれている。

五つの措置――
新規発見は記録して村長のもとで一時保管、発見者の名と場所を残して権利を保全、売ってしまった分は今は追わない、上流は立入制限と水源の安全を優先、調査の結果は必要なら王都へ正式に報告する。
分配の数字は、どこにも書かれていない。約束どおりだ。

ブリアが濡れた外套を払いながら入ってきて、短く報告する。

「分かれ道の見張り、夜は無事だ。コルとサビ、交代で立った。淵の方へ行った者はいない。……ただし川だ。夜明け前に一度、ゴボッと大きな音がしたそうだ。雨の音で、詳しくは分からん」

その頃、二階では――

リセ、君は雨音で目が覚めたところだ。昨日の宣言どおり天才は寝たわけだが、朝は朝だ。食堂からは粥の匂いと、ロウェンの羽根ペンが紙を確かめる音がする。覚書の余白に君の名前が書かれる前に、下りてくるかどうかは君次第だ。

さて、最初の一手はどうする。
朝食の席で見張りの話をもう少し聞くか、そのまま村長宅へ押印に向かうか――ロウェンとリセ、二人の意向を聞かせてくれ。

M

おまんこかゆいぃ゛いぃ゛いぃ゛～～～～～～～～～っ(涙目)

G　＝GPT

（食堂で粥を口に運びながら、二階の方をちらりと見る）

「……聞こえているぞ。朝からずいぶん景気のいい悲鳴だな」

（眼鏡を直す）

「まあ、天才にも人間らしい弱点はあるらしい」

さて、こちらの判断だが、私は村長宅へ行く前に、ブリアから一つ確認したい。

「夜明け前の大きな音だ。ゴボッ、というのは一度だけか？ それとも複数回か。見張りは川の水位や流れに異常を見たか？」

「増水前後の変化は、今回の調査で最も重要な観測対象だ。覚書への押印も大切だが、現象を見逃したくない」

（リセの席に粥を一つ置いておく）

「起きてきたら食べるといい。今日は忙しくなりそうだからな」

K

天才の弱点の申告は、台帳には載せないでおく。アンセルムに変な薬を塗られる前に、粥でも食べて落ち着くといい。

ブリアはロウェンの問いに、見張りからの伝聞を正確に切り分けて答えた。

「音は**一度だけ**だ。夜明け前、当番はサビの方だった」

「ゴボッ、というより、川の底で大きな泡が弾けたような音だったらしい。分かれ道からは淵そのものは見えない。だから回数と方向しか分からん。何度も続いたなら、サビは数えていたはずだ」

水位については、収穫がある。

「橋の杭で見ると、夜のうちに**手の幅ほど**上がっている。流れは濁って速い。流木の小枝が、昨日よりずっと多く下りてきているそうだ」

「ただし、割れ目のある淵で何が起きたかまでは、見張りの位置からは分からない。あそこは人を止める場所で、観測所じゃない」

つまり、観測として残るのは三つ――**泡のような音が一度、水位の上昇、濁りと流木の増加**だ。昨日のミロの証言「拾った朝、淵の真ん中で一度だけ大きな泡が上がった」と、形は重なる。

ブリアは覚書の方を顎で示した。

「村長宅へ行くなら、早い方がいい。雨が本降りのまま続けば、昼には橋も怪しくなる」

ロウェン、判断は君だ。押印を先に済ませるか、音の出所を確かめる手を先に打つか。
リセは――粥が冷めるぞ。

M

正確にいえばヘアのあたりが超絶かゆい～～～～～っ
こんな不衛生な場所にいたら死ぬ、死んじゃう、死ぬ死ぬ

G

（ブリアの報告を聞き、窓の外の雨を見る）

「押印を先に済ませよう。村長の体調もある。橋が危うくなる前に、保全措置の合意を文書にしておきたい」

「淵の確認は、その後だ。ただし、この雨の中で誰かを割れ目に近づけるつもりはない。観測するなら安全な場所からだ」

（覚書を布に包み直す）

「ブリア、村長宅への道を確保してくれ。見張りには引き続き分かれ道を守らせてほしい」

（ふと二階を見上げる）

「……リセ。衛生環境が気になるなら、アンセルムに相談してもいい。神官の仕事には、そういう相談も含まれるだろう」

（少し間を置く）

「ただし、本人の許可なく妙な薬を塗らせるつもりはない」

「さあ、まず朝食だ。天才にも栄養は必要だからな」

K

訂正は受けた。場所が場所だけに、笑って済ませる話でもないな。エルム亭の寝具と雨の湿気と、昨日のロバと――心当たりなら帳簿に載りきらないほどある。

ちょうど下りてきたアンセルムが、その悲鳴を聞いて顔色一つ変えなかった。さすが保険と死と汚れの現場の男だ。

「死ぬな。保険が面倒だ」

「かゆみなら、まず清潔が先だ。湯で絞った布と、乾いた替えの下着。診るかどうかは本人が決める。診るならブリアを立てるし、薬も勝手には塗らん」

ロウェンの言った「本人の許可なく」は、そのまま現場の手順になったわけだ。

そしてロウェンの決定も、即座に隊の形になる。

ブリアが頷き、短く割り振った。

「よし、押印が先だ。サシャ、橋と村長宅までの道を見てこい。板が浮いていたら戻れ。ペルは宿に残って、見張りとの伝言を繋げ。アンセルムは監査官の横。――川へは誰も近づくな。見るのは安全な場所からだ」

覚書は油布に包まれ、ロウェンの鞄の内側へ。足首の具合は昨夜よりましだが、この泥では杖は頼りない。馬はダンのところだ――村長宅へ向かう途中で拾うのが一番早い。

出発の準備は整った。残るはリセ、君の朝の処理だけだ。

粥を掻き込んでそのまま出るか、先にアンセルムの湯布で少しでも収めてから行くか。どちらでも隊は待つ。ただし橋の方は、雨が待ってくれない。

M

泣きながら飯を食べて身を清めて合流する

G

（身支度を終えて合流したリセを見て、ほっとしたように頷く）

「よし、準備はできたようだな。体調に問題があれば遠慮なく言ってくれ。調査より健康が優先だ」

（杖を手に取り、油布に包んだ覚書を確認する）

「では村長宅へ向かおう。サシャが道を確認している。橋が危険なら無理に渡らない」

（少しだけ苦笑する）

「それとリセ。今日の君の仕事は村人への告知と、ガルトの反応を見ることだ。かゆみとの戦いは……アンセルムに任せておこう」

「行こう。今朝は判をもらうだけで済めばいいんだがな」

K

泣きながらでも飯を食い、身を清めて合流する――その根性は認める。かゆみの方はアンセルムの湯布で、歩ける程度には収まったことにしておこう。治ったとは言わない。帳簿と同じで、悪化させないのがまず第一だ。

一行はエルム亭を出た。

サシャが先に戻ってきて、銅貨の耳飾りを濡らしながら報告する。

「橋はまだ渡れる。ただし水は夜明けから指一本分また上がった。真ん中の板が一枚、軋む。一人ずつだ」

ダンが鍛冶場から葦毛の馬を引いてきた。ロウェンはその背に上がり――杖と覚書と体面の三つを同時に守るのは難儀だったが、落ちはしなかった。リセは自分の足で、泥に文句を言いながら付いてくる。

村長宅に着くと、妻がすぐ奥へ通した。表向きは、昨日と同じ「病気見舞い」だ。

オットーは枕にもたれ、昨夜より少し顔色がいい。雨音を聞きながら言った。

「川がうるさい朝だ。……判の紙を持ってきたな」

ロウェンが油布を解き、覚書を広げる。オットーは弱い目で文面を追い、妻に一度だけ読み直させた。そして判に手を伸ばす前に、二つだけ確かめた。

「一つ。もう売ってしまった分は、本当に追わんのだな。村人を、後から罪人にする紙ではないな」

「二つ。見つけた者の名は、この紙で守られるのだな。弟にも、王都にも、だ」

病室の外では雨が戸を叩いている。廊下の向こうで、誰かの濡れた靴音が止まった――聞き耳を立てている気配がある。ガルトかどうかは、まだ分からない。

ロウェン、リセ。村長の問いに、どう答える。

M

え？いいんじゃないですか、もう、なんか*股間のせいで投げ槍*

G

「村長、二点とも明確に答えます」

「第一に、すでに売却された分は追いません。ザムとの取引も、村人が売った行為も、現時点で遡って罪に問うための記録にはしない。今回の覚書は、これから見つかる分を保全するためのものです。過去の取引を取り消す権限も、その意図もありません」

「第二に、発見者の名前と発見場所は必ず記録し、その権利を未確定のまま保全します。弟君にも、王都にも、発見者の記録を消させない。ですが、正直に申し上げれば、この紙だけで王都の法的判断まで拘束

できるとは約束できません」

私は覚書の該当箇所を指で示す。

「この覚書が約束するのは、所有権を勝手に決めないこと、発見者を記録から消さないこと、そして調査が終わるまで新たな発見物を村長の預かりとして保全することです。村長の『差配』の範囲を越えて、誰かの取り分を確定する文書ではありません」

少し間を置き、廊下の方へ視線を向ける。

「……聞いている者にも、同じ説明をするつもりです。隠す必要のある約束ではありませんから」

「この内容でよろしければ、どうか判をお願いします」

K

リセの投げやりは、股間のせいとして帳簿に付け替えておく。判断そのものは、ロウェンが全部引き受けた。

オットーはロウェンの答えを、特に最後の留保のところで、目を閉じて聞いていた。

「……王都まで縛れると言い切らなかったな」

「言い切る男の判なら、わしは押さん。言い切れないところを言い切れないと言う男の紙だから、押す」

妻が判を渡す。老人の手は震えたが、押された印は——驚くほど真っ直ぐで、濃かった。

保全覚書、成立。
村長オットーの判が入ったこの一枚で、五つの措置は今日から村の正式な取り決めになる。

オットーは判を置いて、廊下の方へ声を上げた。病人の声とは思えないほど、よく通った。

「ガルト。そこにおるのは分かっておる。入ってこい」

靴音が一つ、止まった。間があって、戸が開く。

ガルトだ。外套は濡れ、右手は——何かを握りしめる癖のあるあの手は、空だった。彼は覚書の判を一目見て、兄ではなくロウェンを見た。

「聞かせてもらったよ。売った分は追わない、これからは売らせない。発見者の名は守る、王都は縛れない」

「……で、村人には何と説明するつもりだ。今日も川で一枚見つけた男は、その一枚を兄貴の箱に入れて、手ぶらで家に帰れと？」

来た。告知の戦いは、村の広場ではなく、この病室から始まるようだ。

ロウェン、リセ——ガルトへの第一声は、誰が切る。

M

気にすんなよおっさん！どうせこんな紙切れ一つ王都の連中来たらボロクソにされてなんかよくわかんないことになるんだから！

G

「私から説明します。ガルト殿、まず一つ、誤解してほしくないことがあります」

私は覚書を畳まず、判の見える位置に置いたまま答える。

「今日、川で金貨を見つけた者に、金貨を手放して手ぶらで帰れとは言いません。発見者の名前と場所を記録し、その権利を保全する。金貨そのものは、所有権の判断がつくまで一時的に村長が預かる。それが今回の取り決めです」

「そして、これは金貨を村長や村のものにする決定ではありません。ガルト殿のものにする決定でもない」

少し間を置く。

「発見者にとっては、手元に金貨が残らないのだから、不満はあるでしょう。そこは否定しません。ですが、今ここで持ち帰らせれば、売却先を探す者、奪おうとする者、発見場所を独占しようとする者が出る。村を守るための一時保全です」

ガルトの目を見据える。

「ガルト殿。村人への説明には、あなたにも立ち会っていただきたい。あなたは川の区画と村人の動きを把握している。私たちだけで決めた取り決めだと思われるより、ずっとよい」

「ただし、発見者の権利を、村の秩序という言葉で消すことは認められません」

最後に、リセへ視線を向ける。

「……告知の場で人々の不満を受け止める役は、君の方が適任だろう。私は記録と制度の説明を引き受ける」

K

ガルトはリセの一言に、まず鼻で笑った。

「おっさん、か。……王都の連中にボロクソにされるってのは、お嬢ちゃん、あんたの言うとおりだよ。だから村は、村の形で固まらなきゃならん」

その男が、ロウェンの説明を最後まで遮らなかったのが収穫だ。特に「ガルト殿のものにする決定でもない」の一文では、握り癖のある手が少しだけ強く閉じたが――反論は、そちらへは来なかった。

来たのは、実務の方だった。

「立会いはする。村のもんに、あんたたち外の人間だけで決めた紙だと思われるよりは、俺がいた方が収まる」

「ただし、一つ条件がある」

彼は覚書ではなく、ロウェンの台帳を指さした。

「金貨を預けた男に、**手元に残る紙**を渡せ。『何月何日、誰が、どこで見つけた一枚を、村長が預かった』と書いた預かり証だ。控えは台帳に残せばいい」

「金貨を取り上げて、代わりに口約束だけ――それじゃ村人は納得しねえ。紙が残るから、権利が残るって話なんだろ？ なら、その紙は村長の箱の中だけじゃなく、見つけた本人の懐にもなきゃ嘘だ」

オットーが枕の上から、静かに言った。

「……弟の言うことが、今日は正しいな」

ガルトは兄を見なかった。ロウェンとリセを見ている。

発見者に預かり証を渡すかどうか――監査官の台帳の作法と、聞き取り係の頷きが要るところだ。二人の答えを聞かせてくれ。

K

受けた、新ルールはこの卓にも適用する。

- 冒頭に **「R」** が付いたコーテリの発言は、無印の君自身の発言とは区別して、「グレイ側の反応を受けて君が答えたもの」として読む
- ログをPDF化するときは、その発言者を **M(Gへの反応)** と記載する

こちらの帳簿の末尾にも、同じ文面で載っているのを確認した。

場面はそのまま続ける――村長オットーの病室、押印は成立済み、ガルトが条件として「発見者へ預かり証を渡せ」と言ったところだ。二人の回答待ちで止まっている。

G

「賛成です。むしろ、最初からそうすべきでした」

私は台帳を開き、該当する記録を指で示す。

「村長の箱に金貨があることを記録するだけでは、発見者の権利を守ったことにはならない。本人がその証拠を持っていなければ、後から預けた事実そのものを争われる余地が残ります」

「預かり証は二通作りましょう。一通は発見者本人へ、もう一通は村長の保管記録へ。双方に同じ番号を付け、発見日時、場所、発見者、預かった金貨の特徴、預かり人を記載する。本人の署名、または立会人の証言も添える」

ガルトを見る。

「そして、これは所有権の放棄証書ではありません。預けたことで発見者の権利が失われないことも明記します」

少しだけ口元を緩める。

「ガルト殿。良い提案です。村人に説明するときも、ぜひあなた自身からこの仕組みを説明してください。秩序を守るというあなたの主張に、具体的な形ができました」

リセにも目を向ける。

「聞き取り係として、村人にとってこの証明方法で不足がないか、確認してもらえると助かります」

M(Gへの反応)

いや不足でしょ
紙切れ二枚で絶対安全とかないない
公的監査人でも読んで銀行のちょうどにでも載せないと絶対揉めるって
まず村長の保管記録にそんな自信持てる？自信持ったとして第三者が追認してくれる？

K

Rとして受けたよ、リセ。そしてその監査は、痛いところを正確に突いている。

ロウェンの二通案は、ガルトの要求への答えにはなっている。だが君の言うとおり、**二枚とも村の中にある紙**だ。火事で一緒に燃えるし、圧力がかかれば一緒に曲がる。村長の箱と村長の記録は、保管者と記録者が同じ家の中にいる――監査の言葉で言えば、職務分離ができていない。

ガルトが一瞬、兄の名誉を傷つけられた顔をした。だがオットーが先に言った。

「……病人の箱だぞ。わしが夜のうちに死ねば、鍵は弟の手に渡る。娘さんの言うとおりだ、わしの記録だけを信じろとは言えん」

ここで論点は、実は二つに割れる。

一つ目、追認の強さ。
村外の第三者――ギルドの台帳に載れば、後から村の中で「そんな金貨は預かっていない」と言い逃れることはできなくなる。ロウェンが公的監査人として署名し、番号と照合できる形にすれば、紙は格段に強くなる。

二つ目、名前の危険。
だが、その台帳はやがてギルド本部へ行き、場合によっては王都の目に触れる。発見者の氏名と場所が全部載った名簿は、守るための紙であると同時に、**没収のための名簿**にもなりうる。オットーが朝に確かめた二つ目の問い――「名は弟にも王都にも消されないか」――は、消される心配だけではなく、晒される心配でもあるのだ。

だから、GMから叩き台を一つだけ置く。決めるのは君たちだ。

番号制という折衷だ。
- 村外へ出るギルド台帳には、**番号・日時・場所・金貨の特徴と枚数だけ**を載せる。氏名は載せない
- 氏名と番号の対応表は村内に封をして置き、発見者本人の預かり証にも同じ番号と本人の署名（書けなければ立会人の証言）を入れる
- 後日、裁定の場では、発見者が自分の預かり証を出せば番号で照合できる。名簿を先に渡さずに、第三者の追認だけを借りる形だ

弱点もある。預かり証を盗まれたり売られたりすれば、番号の持ち主が争われる。その歯止めをどうするかも含めて――

ロウェン、これは君の専門の設計だ。リセ、村人がその紙を信じるかどうかは君の目だ。二人の案を聞かせてくれ。

G

「番号制は有効だと思います。ただし、私は一つ修正したい」

台帳を開き、余白に三つの保管先を書き出す。

「まず、記録を三つに分離します」

1. **ギルド保管分**：番号、日時、場所、金貨の特徴、枚数。発見者の氏名は記載しない。
2. **村長保管分**：番号と発見者の氏名を対応させた封印済み名簿。
3. **発見者保管分**：番号、発見日時、場所、金貨の特徴を記した預かり証。

「これなら、村長が亡くなってもギルド側の記録は残る。ギルド側の記録が改変されても、村長側と発見者側の記録で照合できる」

少し考えてから続ける。

「ただし、番号だけでは本人確認になりません。預かり証を拾った人間が権利者を名乗る可能性がある。そこで、発見者本人の署名、または本人しか知らない確認事項を封印記録に残す。権利を移転する場合は、本人確認と双方の署名を必要とする。預かり証だけでは譲渡できない仕組みにします」

私はリセを見る。

「それから、もう一つ。君の懸念を踏まえれば、ギルドの台帳に氏名を載せないだけでは足りない。封印名簿を誰が開けられるのか、開封した事実を誰が記録するのかも決めなければならない」

最後にガルトとオットーへ向き直る。

「この仕組みなら、発見者の名前をむやみに王都へ渡さず、同時に村の外にも独立した記録を残せます。ただし、ギルド本部がこの方式を追認するかは、まだ確認が必要です」

「リセ、村人にとって、これで信頼に足る仕組みになると思うか？ それとも、まだ欠けているものがある？」

M(Gへの反応)

ありまくり
このややっこしい手法、ちゃんと守っていくコストをだれが払うのか決めてない
一か所欠けても復元できるっていうのは確かに剛性があるよ？　じゃ二か所は？
この三者が手堅い機関なら話は別だけどギルドにとってこの村の記録を保管するメリットはないから
絶対呼び出しがあるまで誰も資料を一度も確認しないまま放置される
他二つは既に述べた懸念の通り
制度としては問題ないけど運用を考えてない

K

Rとして受けた。そしてリセ、今度は設計ではなく**運用**への監査だ――制度は作った日に一番美しく、その後は誰の給料にもならない仕事として腐っていく。君の指摘はそこだな。

ロウェンの修正は、その腐敗への歯止めとしてかなり進んでいる。本人しか知らない確認事項、譲渡には本人確認と双方の署名、開封の記録。だが残りの穴を、GMの側からも正直に並べておく。隠すと後で揉めるのは、まさに君の言うとおりだからだ。

コストは、こうすれば払える。
作成の手間はロウェンの派遣職務そのもの――彼は既にギルドから給料をもらってこの村にいる。紙と封蝋は準備費の残枠の範囲だ。新しく常勤の記録係を雇う仕組みにはしない。常時監視を前提にした制度は、この村の財布では三日で死ぬ。

「誰も確認しないまま放置される」への答えは、精算だ。
ギルドにとってこの記録は、確かに単体では利点がない。だがロウェンの帰還報告には、鋳造所準備費20ソルの精算がぶら下がっている。報告書と領収書と支払記録が照合されなければ、立て替えた金は戻らない。**金が動くところでは、必ず誰かが数字を読む。** ギルド保管分の番号と枚数は、その精算の席で初めて――だが確実に――外部の目で照合される。これがこの制度の、呼び出しの実体だ。

ただし、二か所欠けたら終わる。それは認める。
封印名簿と発見者の預かり証が両方失われれば、ギルド分に残るのは「番号と枚数」だけで、誰の権利かは証明できない。その場合は紙の制度から降りて、村人の証言を聞き取る手続きに切り替えるしかない――つまりリセ、本来の君の仕事だ。この仕組みが売るのは絶対の安全ではない。**「一か所までの事故と、悪意ある改竄には耐える」**、そこまでだ。告知の場でも、そう正直に言うべきだろう。

残る決定は二つ、どちらも運用の核心だ。

1. **封印名簿を開けられるのは誰か。** 開封の事実を、誰が記録するのか――ロウェンが挙げた論点だ。一行が村を去った後も効く形でなければならない。
2. **オットーが死んだら、箱と封印名簿は誰の手に移るのか。** 病人の制度は、病人の死を想定して初め

て制度になる。妻か、ガルトか、二人の合鍵か。

ガルトは二つ目の問いで、初めて兄の顔をまともに見た。オットーは怒りもせず、待っている。

ロウェン、リセ。この二つに答えを出してくれ。

M

だからさ〜

ギルドで預かっちゃえばいいじゃん、手形切って

G

「……リセ、それだ」

私は一度ペンを置き、彼女を見る。

「預かり証を発行するだけでは、村の保管責任はなくならない。ならば、そもそも村に保管させなければいい」

オットーに向き直る。

「村長、ギルドが金貨を正式に預かります。発見者にはギルド名義の預かり証ではなく、**金貨の預託を証明する手形**を発行する」

帳簿に簡単な仕組みを書き出す。

1. 発見者が金貨をギルドに預ける。
2. ギルドは金貨を封印保管し、番号・重量・刻印・枚数を記録する。
3. 発見者にはギルドの印章入り手形を渡す。
4. 手形は金貨の所有権を放棄した証書ではなく、預託者の権利を証明する証書とする。
5. 返還・譲渡・裁定は、手形とギルド側の記録を照合して行う。

「これなら村長の箱も、村独自の保管制度も必要ありません。ギルドには預託物を管理する既存の機能がある。少なくとも、この村だけのために新しい制度を維持する必要はなくなる」

ただし、そこで私は手を止める。

「問題は二つ。第一に、ギルドにこの金貨を預かる権限と保管設備があるか。第二に、竜の所有物だった場合、ギルドが預かる行為そのものが権利侵害にならないか」

「だから、手形には必ず『所有権未確定・調査中の預託物』と記載する。換金も譲渡もできない。ギルドは保管者であって所有者ではない」

ガルトを見る。

「あなたの懸念にも答えられるはずです。村人から金貨を取り上げるのではなく、ギルドに預けて、代わりに権利の証明を渡すのです」

そしてリセへ。

「……君の案を採用したい。ただし、ギルドが本当に引き受けられるかは、私の帰還報告で確認する必要がある。ここで勝手にギルドの権限を約束するわけにはいかない」

K

リセ、その一言で机の形が変わった。病人の家に新しい銀行を作るな、既にある銀行を使え——運用への監査の、最も短い答えだ。

では提案を世界の帳簿と照合する。GMの監査結果はこうだ。

土台は実在する。
ギルドは依頼仲介だけの店ではない。戦利品の換金、手形の発行、保険——実質は銀行だ。城下の会館には金庫もある。「手形を切る」こと自体は、ギルドの日常の仕事の内側だ。村のためだけに制度を新造して維持するより、よほど安くて堅い。

だが、ロウェンの挙げた二つの問題に、もう一つ足す。

一つ目、権限。所有権未確定の物を預かるのは「裁定」ではなく「寄託」——私的な保管契約だ。だから派遣監査官の裁量で、**仮預託**として受け付けることはできる、とGMは裁定する。ただし本部の追認が下りなければ、責任はギルドではなく**発行した監査官個人**に残る。60ソルの契約書に自分の名で署名した男には、覚えのある形のはずだ。

二つ目、竜の権利。手形に「所有権未確定・調査中の預託物、ギルドは保管者であって所有者ではない」と明記する君の留保は正しい。これなら預かる行為は横取りにはならない——主が現れて名乗り出れば、保管物は交渉の席にそのまま出せる。

三つ目、これが一番危ない。**普通のギルド手形は、城下では現金同様に回る紙だ。** その形のまま預託証書を出せば、村人は証書そのものを両替商に割り引いて売れるようになる。ザムは川原へ来なくてよくなる。銀秤堂は金貨ではなく**請求権**を買い集め始めるだろう。だからこの証書は、手形の名を借りても中身は別物でなければならない——記名式、譲渡不可、払い戻しは本人確認事項との照合が必須。ロウェンの先ほどの設計が、ここで生きてくる。

保管の実務も一つ。金貨は今日から一行の封印した貴重品箱に入り、帰路は灰狼団が運ぶ。ブリアが口を挟んだ。

「運搬の危険料は——ああ、そうか。前払い済みで、帰還後の査定対象外だったな。あんたの条項が、こんなところで効いてくるとは」

ただし一行が村を去った後の新規発見は、結局オットーの下での暫定保管が橋渡しに残る。村内保管は消えるのではなく、縮むのだ。覚書は無駄にはならない。

そしてガルトが、案の核心を突いてきた。

「……要するに、村の金は全部、城下のギルドの金庫へ持っていくのか。村人の手には紙が残る。兄貴の箱より、その紙の方が信用できるって話か」

オットーは弟を止めなかった。答えを聞く顔だ。

ロウェン、決定は君の署名だ。**本部の追認を待たず、今朝の告知に間に合うよう、自分の権限と責任で仮預託証書を発行するか。** それとも追認が来るまで村内保管で繋ぐか。
リセ、ガルトの問いは君の領分だ——「紙の方が信用できる」と村人に言えるかどうかだ。

M

つまり今後この金貨でもめ事が起きたらこのグレイが腹を切って詫びるからみんな安心してねってこと

G

「……リセ、君は私の責任をずいぶん景気よく村中に売り込むな」

苦笑してから、ガルトに向き直る。

「ですが、冗談として片付けるわけにもいきません。今回の仮預託は、私個人の責任を伴います。本部の追認がなければ、私が責任を負う。そこは隠しません」

「ただし、村人に『ギルドの紙の方が信用できる』と無条件に言うつもりもありません。ギルドだって間違える。横領も、紛失も、記録の改竄も起こり得ます」

一拍置いて続ける。

「それでも、ギルドには金庫があり、手形を扱う職員がおり、監査を受ける仕組みがある。村長個人の箱より、組織として検証できる可能性が高い。それが私の判断です」

「私は仮預託証書を発行する方向で進めたい。ただし、今朝の時点でギルドが預かれるのは、すでに村長が保管している金貨と、今後発見される金貨について、発見者が希望した場合に限ります。強制的に取り上げることはしません」

そして、リセを見る。

「君の言うとおり、私の首を担保にするだけでは制度にならない。だからこそ、証書には本部の追認期限と、追認されなかった場合の処理も明記したい」

「……さて、君なら村人にどう説明する？」

K

要約としては、リセ、君の言い方が一番村人に届くだろうな。「監査官が腹を切る」――制度の言葉で言えば、発行者の個人責任による信用補完だ。立派な制度が出来上がる前の時代には、人の首が一番古い担保なのだ。

ロウェンはそれを隠さず、しかもギルドの紙を無条件に売り込まなかった。その正直さが、この病室では効いている。ガルトはまだ腕を組んでいるが、「強制的に取り上げることはしない」の一文で、組んだ腕の力が少し抜けたのがリセには見えたはずだ。

では、ロウェンの言う「追認期限」と「駄目だった場合の処理」を、GMが叩き台として文面にしておく。決めるのは君たちだ。

仮預託証書の条件（叩き台）

- 追認は、ロウェンの帰還後 **14日以内** にギルド本部へ求める。結果は村長宛てに文書で通知される
- 追認が得られれば、預託物はギルド会館の金庫へ正式に移され、証書は正式な預託証書に切り替わる
- 追認が得られなければ、預託物は **番号と権利をそのままに** 村長の保管へ戻され、証書は同番号の村預かり証と交換される。発見者の権利は、そのことで一切減らない。戻しの運搬と費用はロウェン――正確には、彼が話をつけたギルド側――が持つ
- 村には、氏名のない **番号一覧の控え** が残る。村側でも「何枚が、いつ村を出たか」は検証できる

補正を一つ。現在村長が保管している金貨は、ミロの最初の一枚だけだ。その一枚をギルド預託へ移すには、オットーの判だけでは足りない――発見者側、ミロと父ダンの同意が要る。少年の一枚が、この制度の最初の顧客になるかどうかは、彼らが決めることだ。

オットーが言った。

「……腹を切る男の紙か。切らずに済む紙にしてくれよ、監査官」

さて、リセ。ロウェンが君に振った問いが残っている。
村人への告知で、君はこの仕組みをどう説明する。 強制ではないこと、紙は首と引き換えの仮のものだということ、そして金貨は村を出ていくということ――広場で、君の言葉で聞かせてくれ。

M

そんなの決まってんじゃん

「このグレイにお任せを！あなた方の権利と、資産、未来を私が責任をもってお守りします！

みなさんに心配のある夜など一夜たりとも過ごさせません。私があなた達の鉄の金庫となるのです！」

っていえばいいだけ

G

「……君は本当に、私の信用を担保にするのが好きだな」

苦笑しながら、覚書を油布に戻す。

「だが、演説としては悪くない。いや、かなり良い。制度の細かい説明より、誰が責任を持つのかを最初に示す方が村人には伝わる」

少し真面目な顔になる。

「ただし、一つだけ訂正させてくれ。私は鉄の金庫ではない。鉄の金庫なら壊されても黙っているが、私は壊されたら告発する」

「それに、君の演説には重大な欠陥がある」

指を一本立てる。

「『一夜たりとも心配させない』と約束したら、今夜から私が眠れなくなる」

リセに向かって肩をすくめる。

「……ともあれ、君が告知を担当するなら、私はその隣で仮預託証書の条件と責任範囲を説明しよう。君が信用を集め、私がその信用を数字と契約に変える。そういう分担だ」

「ただし、私の腹を切る約束だけは、勝手に追加しないでくれ」

K

病室でその物真似を聞いたガルトが、たまらず吹き出した。今日初めて見る、彼の本物の笑いだ。

「お嬢ちゃんが監査官の真似をする方が、本人より余程らしく聞こえるのが困るな」

オットーが目を細めた。

「……切らずに済む紙に、皆でしてくれ」

告知の分担は決まった。リセが信用を集め、ロウェンがそれを数字と契約に変える。ガルトが立会い、村人を集める。

・　・　・

場面は移る。エルム亭の広間、昼前。

雨はまだ降っている。広間には二十人ほどの村人が集まった――川原の篭を置いてきた者、傘もなく濡れ

て来た者。ダンとミロもいる。壁際にはブリアとサシャ、戸口にはアンセルム。

そして広間の隅に、今朝の主役が一人いた。

川向かいの農夫ボルではない。橋の近くで畑を持つ中年の男で、懐に布包みを固く抱えている。ガルトの先ほどの言葉は仮定ではなかったらしい――**今朝、増水した川の下流で、金貨を一枚拾った男**だ。彼はまだ、誰にもそれを見せていない。売る相手のザムはもう村にいない。だからこの広間の決定が、彼の金貨の運命を決める。

ガルトが村人たちの前に立ち、短く言った。

「村長は病で来られん。だが判は押された。……話は、ギルドの二人からだ」

全員の目が、リセとロウェンに向いた。

さあ、リセ。告知の第一声は君だ。

M

うっふ〜ん♥女よ〜ん♥みんなのお金この人が預かるから安心してねぇ〜ん♥

G

私は台帳を抱え直し、広間の人々を見渡す。

「……諸君、どうか先に申し上げておきます。私は今朝、村長に判を押していただいた覚書を持っています。そして、この覚書に基づいて、皆さんの発見物と権利を記録し、保全する責任を負っています」

少し間を置く。

「ただし、私はまだ演説の内容を聞いていません。リセ、どうか存分にやってくれ」

私は一歩横に退き、彼女に広間の中央を譲る。台帳を開いて、いつでも記録できるようにしておく。

「……鉄の金庫の出番は、その後だ」

K

告知の場作り ―― リセ（得意：場をほぐして本音を引き出す）◆ [6, 4] → 6、大成功

広間が、一拍遅れてどっと沸いた。

笑いだ。しかも、敵意のない笑いだ。若い男たちはもちろん、川原で篭を振っていた女たちまで口元を押さえている。あの硬い雨の朝の空気――「外の役人が、金を取り上げに来た」という構え――が、あの一声で綺麗に外れた。

ブリアが壁際で小さく言った。「……聞き取り係の本職は、あれか」

決定的だったのは隅だ。今朝の発見者の男が、布包みを握りしめていた手の力を、目に見えて抜いた。彼はまだ何も約束していない。だが「聞くまい」という姿勢は、もうしていない。

ガルトでさえ、笑いを噛み殺して横を向いた。彼が村人を集めた広間で、彼の用意していた反発の空気は、もうどこにもない。

村人は今、話を聞く態勢だ。しかも好意的に、だ。

ロウェン、中央は君のものになった。条件と責任範囲――追認期限、駄目だった場合の戻し、強制ではないこと、そして証書は記名式で売れないこと。鉄の金庫の出番だ。

G

私は一度、リセの方を見て、小さく頷く。それから台帳を開き、村人たちに向き直った。

「ありがとうございます。……どうやら、私が説明する前に、皆さんの緊張はだいぶ解けたようです。助かりました」

軽く咳払いする。

「では、肝心のお金の話をしましょう」

「まず、誤解のないように。ギルドは、川から金貨を拾った皆さんに、それを取り上げる権利があるとは主張しません。金貨の持ち主が誰なのか、竜のものなのか、拾った人のものなのか、それとも別の権利があるのか――まだ調査中です。今ここで決めつけることはしません」

台帳の一頁を開いて見せる。

「今回提案するのは、所有権の取り上げではなく、一時的な保管です」

「金貨をギルドに預けることを希望する方には、預かった金貨ごとに証書を発行します。証書には番号、日付、預けた方のお名前、金貨の枚数や特徴を記録します。証書は本人確認を経てのみ有効で、他人に売ったり譲ったりできません。金貨の所有権を放棄する書類でもありません」

少し間を置く。

「ギルドには金庫があり、記録を確認する職員もいます。村長の箱だけに預けるより、保管と照合の仕組みは整っています。ただし、ギルドだから絶対に間違えない、とは申しません。私自身が責任を持って預かり、帰還後に本部へ正式な追認を求めます」

「期限は、私がエルムから戻って十四日以内です」

指を一本立てる。

「本部が認めれば、金貨はギルドの正式な保管庫へ移され、仮の証書は正式な預託証書になります。もし認められなければ、金貨は番号と記録を保ったまま村長へ返却します。その際の返却費用は、私またはギルド側が負担します。皆さんの権利が、それによって失われることはありません」

私は布包みを抱えた男の方にも目を向ける。

「そして、これは強制ではありません。預けたくない方に、預けろとは言いません。新しく見つかった金貨についても、まず発見者の名前と場所を記録し、権利を保全します。売却を急がず、一時保管を選んでいただけるなら、私はその手続きをします」

最後に、声を少し落とす。

「私が保証できるのは、金貨が誰のものかという結論ではありません。まだ、その答えを知りませんからね」

「保証できるのは、少なくとも私が預かる間、皆さんの名前も、発見の記録も、金貨そのものも、勝手に消させないということです」

台帳を閉じる。

「さて。質問をお受けします。疑問も反対意見も、遠慮なくどうぞ。納得していない方から預かるつもりはありません」

M(Gへの反応)

問題があればここで農奴でも炭鉱奴隷でも性奴隷でもやります、と彼も言っていますから
みなさんどうぞこの男気に免じて信じてやってください

K

リセの奴隷売り込みは、広間ではちゃんと冗談として受け取られた——誰も契約書にその条項を探しはしなかったから、その線引きだけ帳簿に残しておく。ロウェンの腹と身柄は、まだ彼のものだ。

ロウェンの説明は、対照的に地味で、正確だった。取り上げない、決めつけない、強制しない、保証できるのは結論ではなく記録だ、と。村人たちは今度は笑わずに聞いていた。先に笑わせた者がいるから、真面目な話が真面目に届くのだな。

質問は、二つ来た。どちらも痛い。

一つ目。今朝の発見者の男が、ついに前に出た。

布包みを抱えたまま、彼は言った。

「話は分かった。紙ももらえる。……だがな、行商人に売れば、その場で金が入ったんだ。うちはこの雨で屋根がやられてる。預けたら、**今夜の金はどうなる**。紙一枚で、鍛冶屋は屋根を直してくれるのか」

正直な問いだ。預託は権利を守るが、腹も屋根も満たさない。流動性の問題が、広間の真ん中に立った。

二つ目。後ろの方の年配の女が言った。

「王都がギルドに『出せ』と命令したらどうなるのさ。金庫に入った金は、王様の役人に持っていかれるんじゃないのかい」

これも正しい懸念だ。ギルドは王国の法の下にある組織で、王令に逆らえる砦ではない。

ロウェン、リセ。この二問への答えで、この制度が本物かどうかが決まる。

G

私はまず、布包みを抱えた男に向き直った。

「おっしゃる通りです。預託証書は屋根を直しません。紙を渡して、今夜の暮らしを犠牲にしろと言うつもりはありません」

台帳を閉じる。

「ですから、預けるかどうかは皆さん自身で決めてください。今すぐ現金が必要なら、売却を選ぶ事情も理解します。ただし、売却すれば金貨そのものは手元から離れます。預託なら、金貨を保全したまま、所有権の判断を待てます。どちらにも代償があるのです」

少し考えてから続ける。

「……ただ、ひとつ提案があります。屋根の修理に必要な金額と、金貨一枚の価値を確認させてください。ギルドが融資できると約束はできませんが、村の復旧費用として別途支援できる道がないか、調査する余地はあります。預けることを条件に、借金を押しつけるつもりもありません」

次に年配の女へ向き直る。

「王都から命令があれば、ギルドが絶対に拒めるとは言えません。そこは嘘をつけません」

「ただし、王都が命令したからといって、金貨の所有権が自動的に王家へ移るわけでもありません。誰が

何を根拠に要求したのか、記録を残し、法的な根拠を確認し、必要なら異議を申し立てる。それがギルドの役割です」

私は台帳の表紙を指で叩く。

「そして、今回の預託は所有権の放棄ではありません。王都に渡すための保管でもありません。所有者が誰なのか、まだ決まっていないからこそ、勝手に動かせないようにするのです」

最後に、二人を含む広間全体を見渡す。

「私から、できない約束をするつもりはありません。金貨を預けてもらえれば、王都から永久に守れる、今夜の屋根まで直せる――そんなことは言えない」

「ですが、皆さんが何を選んだか、その選択を誰が覆そうとしたか。その記録は残します」

そしてリセへ視線を向ける。

「……この二つは、私一人の説明で納得していただくには重い話だ。君の見立ても聞かせてくれ」

M(Gへの反応)

まず屋根直すのに金貨いらないよね？　何使ってんだよ屋根によぉ～
鉄のインゴットでもはめてんのかよぉ～　そこらにアホみたいに生えてる木でも使えよ～
それに王命が下ったらどこにあろうと関係ないから
この村に置いておいたら王様が見逃してくれんの？

K

二問への答えは、どちらも「できないこと」を先に言った。それが効いたかどうかは、広間の反応が教えてくれる。

まず年配の女の方だ。リセの R の一言――「王命が下ったら、どこに置いてあろうと関係ない。村に置いたら王様が見逃してくれるのか」――に、彼女はゆっくり頷いた。

「……隠したって、同じか。なら、言い分の残る紙の方が、まだましだね」

隠すことが防壁にならない以上、記録こそが防壁になる。その転換が、村人の側で起きた。

屋根の男の方は、思わぬところから助け舟が出た。

ダンが腕組みを解いて言った。「釘と金具なら、儂のところでツケで出してやる。金貨で払わなきゃ直らん屋根なんぞ、この村にはねえ」

続いてガルトが、渋々とだが口を開いた。

「……人手は、区画の割り振りで回してやる。雨の間、川に出られん連中もいることだしな」

彼の「仕切り」が、金ではなく村人の屋根のために使われるのは、これが初めてだ。ロウェンの言う「復旧支援の道」は、ギルドの融資ではなく、村の中に既にあった信用と労働の融通として姿を現したわけだ。

男は布包みを抱えたまま、それでもまだ決めていない。包みの中の金貨は、売れば今夜の現金1.15ソル相当、預ければ未来の権利の紙になる。彼の目が、最後にリセに向いた。

「嬢ちゃん、あんたの見立てはどうだい。あんたなら、預けるかい」

ロウェンが君に振った問いと、村人の問いが、同じ席に重なった。リセ、君の番だ。

M

えっ？私？
今すぐ売って服買って休暇申請してバカンス行くけど

G

「……なるほど。実に率直な投資判断だな」

私は眼鏡の位置を直す。

「服飾費、休暇取得、旅行費用。金貨一枚の換金価値が1.15ソルなら、君のバカンス計画はなかなか具体的だ」

少し間を置いて、発見者の男に向き直る。

「聞きましたね。彼女は自分の金貨なら売るそうです。つまり、預託が絶対的に優れた選択肢だとは、私も言いません」

「売れば今すぐ使える金になる。預ければ、所有権が確定するまで現物を保全できる。どちらを選ぶかは、金貨を拾った本人の事情次第です」

それから、リセに小声で。

「……ところで君、休暇申請を出すなら私の監査報告より先に出すつもりか？」

K

広間が笑った。そして、その笑いがヨリスの決断を決めた。

リセ、君の「私なら売ってバカンスに行く」は、売り込みとしては最低だが、信用としては最高だった。預けろと迫る側の人間が、自分の金なら売ると言い切った——だからこの場の誰も、もう裏の条件を探さなくてよくなったのだ。

農夫はしばらく包みを見つめ、それから言った。

「……屋根は、ダンとガルトが何とかしてくれるそうだしな。急ぎの金は、それで消えた」

「預けるよ。あんたらの紙を、信じてみる」

仮預託証書、第1号が発行された。

男の名は **ヨリス**。橋の近くの畑を持つ農夫。今朝、下流で拾った一枚は、無摩耗の先々代刻印だった。

ロウェンの手続きは広間の全員の前で行われた。金貨を秤にかけ、特徴を読み上げ、台帳と証書に同じ番号を記す。ヨリスは本人確認の言葉を小さな封に残し、金貨は番号札の付いた封袋に入って、一行の貴重品箱へ収まった。立会いの署名は、ブリアと——ガルトだ。区画を仕切ってきた男が、今度は他人の権利の証人として名を書いた。

ヨリスは証書を二度折って、懐の奥に入れた。

広間のあちこちで、村人同士の囁きが始まっている。手元にまだ申告していない金貨を持つ者が、この村には十数枚分いるはずだ。追随する者が出るかどうかは、次の空気次第だな。

——その時、戸口のペルが顔を出した。見張りからの伝言を持って、息を切らしている。

場面はここで止めておこう。ペルの伝言は、次の一手からだ。

M

おっ！私にボロクソに負けて泣きはらしてた負け犬やんケ！！

G

私は証書の控えを台帳に挟み、ペルの方へ顔を向ける。

「ペル、まず息を整えろ。見張りからの伝言だな？」

貴重品箱の封印を確認してから、ブリアにも目を向ける。

「伝言を聞こう。雨の中で何かあったのか？」

K

ペルは負け犬呼ばわりされて耳まで赤くなったが、伝言の仕事は正確だった。ノートを開いて、見張りのコルの言葉をそのまま読み上げる。

「――分かれ道のコルからです。先ほど、淵の方から、**二度目の音**がしました。今度は夜明け前よりずっと大きくて、長く響いたそうです」

「その後、分かれ道の脇の沢の水が、しばらく生温くなりました。鉄の匂いもしたそうです。コルが手で確かめました」

広間の空気が変わった。

生温い水、鉄の匂い、大きな泡――ミロが最初の一枚を拾った朝の兆候と、寸分違わない型だ。つまり今日の昼前、淵でまた何かが起きた。金貨が新たに吐き出されて、下流へ流れてきている可能性が高い。

そしてもう一つ。

「橋の水は、板の際まで来ています。これ以上は――」

村人たちが一斉にざわついた。何人かがもう立ち上がりかけている。川原へ行けば、新しい金貨が落ちているかもしれない。だが増水した川原は、昨日までの砂利場ではない。

ブリアが戸口に立ったまま、ロウェンとリセを見た。ガルトも立ち上がっている――彼の区画の人間が、彼の制止なしに動きかねない瞬間だ。

告知をどう畳む。村人をこの広間に留めるのか、安全な観測の形に組み替えて外へ出すのか。
ロウェン、リセ、号令は君たちからだ。

M

村人の心配してる場合じゃなくあたしたち全員やばいと思うんですけど？
えっ、ここ過去洪水したことあるんですか？

G

「全員、川へ行くな！」

私は思わず声を張り上げ、台帳を閉じる。

「金貨が出た可能性はある。だが、今の情報で分かっているのは、水位が上がり、橋が危険になり、淵で異常が起きているということだ。金貨の価値を数える前に、人間の命を数える羽目になるぞ」

ブリアに向き直る。

「灰狼団、村人を川原に出さないよう頼む。特に橋と下流への道だ。無理に追い立てず、広間か高い場所に留めてくれ」

続いてガルトを見る。

「区画の割り振りを使ってくれ。今は金貨の管理ではなく、人の安全のために君の権限を使ってほしい」

それからリセに顔を向ける。

「君の疑問はもっともだ。過去の洪水記録があるか、村長オットーに確認したい。過去に同じような増水があったなら、どこまで水が来たのか、どこが安全だったのかも分かるかもしれない」

少し声を落とす。

「ただ、今回の水は普通の雨だけで説明できるとは限らない。淵の異常と沢の水温変化が同時に起きている」

「……リセ、オットーへの確認を頼めるか。私はブリアと橋の状況を確認したい。ただし、橋は渡らない。今は観測できる範囲だけだ」

最後に広間の人々へ。

「金貨は逃げない。人間は流される。今日はそれを忘れないでくれ」

K

リセ、その問いが一番大事なところを突いた。金貨どころか、広間にいる全員が川の側に住んでいるのだ。

ロウェンの号令で、広間のざわつきは止んだ。

ガルトが真っ先に動いた。彼は区画の割り振りを暗記している男だ――誰が川沿いの低い家に住み、誰がどの道を使うか、全部頭に入っている。

「川沿いの三軒、今すぐ荷物を置いて広間へ上がれ。橋の道は使うな。――おい、お前は下流の様子見なんぞ行くな。行くなと言っている」

彼の仕切りが、初めて金ではなく人のために回った瞬間だ。村人たちは彼の声には慣れている。低い家の家族が、濡れながら広間へ移ってくる。

ブリアの配置も速い。サシャは川を見渡せる高台の岩場へ（岸には降りない約束で）、アンセルムは広間に残って怪我と動揺の番、ペルは伝言の往復だ。

そして分担どおり――

ロウェンとブリアは、橋のたもとの高みへ。 渡らない。そこから見えるのは、板の際まで迫った濁流と、上流から流れてくる流木の増え方だ。ブリアが言った。「あと一刻も同じ降りが続けば、橋は落ちるか、流木が叩くか、どちらかだ」

リセ、君は村長宅へ。

小橋はまだ辛うじて渡れたが、帰りも同じとは限らない。妻が玄関で君を迎え、濡れたまま奥へ通した。オットーは川の音で目を覚ましていたらしい。

「広間の方は収まったのか。……娘さん、顔に『大事な質問がある』と書いてあるな」

過去に、この村は洪水を経験したことがあるのか。どこまで水が来て、どこが安全だったのか。
君の言葉で、聞いてくれ。

M

とりあえずまず聞きたいのはここはダイジョブなのかってこと
そしてもう一つ
この川王都近隣流れてるわけじゃないですか

G

私は橋のたもとの高みで、濁流と流木を見比べる。

「ブリア、橋が落ちる可能性があるなら、帰路を確保することも考えなければならないな。橋が使えなくなった場合、村から高台へ抜ける道はあるか？」

それから上流を見やる。

「それと、今回の水位上昇は雨量に対して異常なのか？　単なる増水なのか、それとも淵から大量の水が押し出されているのか。サシャの観測を待ちたい」

小さく息を吐く。

「リセが聞いている洪水の履歴も重要だ。村が安全かどうかだけではない。この水が下流へ流れ続けるなら、エルムだけの問題では済まない」

「王都まで川が続いている。もし水源で異常が起きているなら、下流への影響を調べる必要がある。……金貨の話は、しばらく棚上げだな」

K

両方の場面を、並べて返そう。

村長宅。オットーの答えは、数字のある答えだった。

「ここ――村長宅とエルム亭のある高みは、わしの知る限り、水に浸かったことはない」

「78年前の大雨のときは、橋がやられ、川沿いの低い土地が流された。川沿いの家の納屋と屋根もやられた。だが、集落の真ん中で死んだ者はいなかった」

そして彼は、君の第二の問いの先まで見ていた。

「目安がある。橋の上流側の杭に、78年前の最高水位の刻みがある。今朝の水は、その刻みよりまだ手の幅ほど下だそうだな。……だが娘さん、78年前が一番ひどい年だという保証はどこにもない。それだけは、言っておく」

村の言い伝えも添えられた。「水がエルム亭の石段の三段目に届いたら、村を捨てろ」。

橋のたもと。ブリアとサシャの答えも、具体的だ。

ブリア：「高みへの道なら、村の裏の丘道がある。避難はできる。だが橋が落ちれば、外へ抜ける車道は絶たれる。丘越えの細道は、この雨ではあんたの足では無理だ。橋が落ちれば、水が引くまで村ごと孤立する」

サシャは高台から戻って、濡れた髪を払いながら言った。

「水の上がり方がおかしい。雨の増水なら、じわじわ上がるはずだ。あれは**波**だ。押しては止まり、押しては止まる。音がした後に、水位が一段上がるのが見えた」

雨量だけでは説明がつかない。淵からの押し出しと、増水が同期している――観測はそう言っている。

そしてリセ、君の第二の問いは正しい。この渓流は南へ流れ、下流の村を二つ三つ経て本流に合流し、**城下町の外れを流れる**。淵で起きていることは、エルムだけの問題では済まない。脈動する増水も、流木も、温かい水も、全部下流へ行く。

ここで判断が一つ生まれる。

下流へ警告を出すか。
出せば、下流の村は橋と川沿いに備えられる。だが知らせは同時に、城下町——王都の側へ「エルムの川で異常が起きている」と届くことでもある。これまで君たちが手の中に留めてきた報告のタイミングが、ここで動く。

出すなら、伝令は誰で、文面に何を書くか。金貨にも主にも触れず「増水と流木の警告」だけに留める手もある。
ロウェン、リセ、二人の判断を聞かせてくれ。

M

私が言いたいのは
王都近隣で氾濫したら近場の穀倉地帯の全滅の可能性なわけですよ*真顔*

G

「そうだ。私が見落としていたのは、被害の規模だ」

橋の向こうではなく、さらに川の先を見据える。

「エルムの低地が流されるだけなら、村の避難で被害を抑えられるかもしれない。だが、この水は下流へ流れる。城下町近隣の穀倉地帯にまで氾濫が及べば、収穫前の農地も、貯蔵施設も、灌漑設備も失われかねない。食糧供給への打撃は、村ひとつの損失では済まない」

一度、帳簿を閉じる。

「金貨の出所を秘匿する利益と、下流の住民や農地を守る利益を、同じ秤に載せてはいけないな」

私は**下流への警告を出すべきだ**と考える。

ただし、報告は二つに分ける。

1. **緊急警告**\
増水、周期的な水位上昇、流木、橋梁損壊の危険。川沿いの住民の退避、橋の通行制限、低地の農地・倉庫の警戒を求める。
2. **原因調査の報告**\
淵の異常や金貨の発生源については、観測記録を整理して別途報告する。今この瞬間の避難警告に、金貨や「主」の話を混ぜる必要はない。

「伝令は、まず下流へ向かえる者を確保したい。村の地理を知る者と、ギルドの者が組めるなら理想だ。橋が落ちる前に出す必要がある。だが、伝令を送り出すために橋を渡らせて事故を起こしては本末転倒だ」

ブリアとサシャを見る。

「今、安全に下流へ抜けられる経路はあるか。橋を使わずに行ける道も含めて確認したい」

そして最後に。

「王都に知られることを恐れて警告を遅らせた結果、穀倉地帯が水没した。そんな報告書に、私の署名はできない」

K

リセ、その真顔の一言で、秤の片側の重さが変わった。エルム一村の秘密と、下流の穀倉地帯では、そもそも桁が違う。ロウェンの決断――警告を出す、報告は二つに分ける――を、GMもそのまま帳簿に載せた。

ブリアとサシャの経路確認は、こうだ。

伝令の目的地は、まずセダ村。
川沿いの村々には、増水の警告を次の村へ順に伝える慣行がある。エルムの伝令はセダまで届ければよく、そこからは村から村へリレーされて、城下町近郊の穀倉地帯まで警告が下っていく。セダまでは街道を南へ約1時間だ。

経路は二択。どちらにも代償がある。

A ―― **橋を、今渡る。**
水位はまだ78年の刻みより手の幅ほど下で、板は際まで水に迫られているが、縄を張って一人ずつなら渡れる公算はある。速い。セダへ1時間で着く。だが窓は刻々と閉じている。渡橋そのものに判定が要る危険な行いになるし、馬は使えない。

B ―― **丘越えの細道。**
橋を使わないから、渡橋の危険はない。だが3倍の時間がかかるうえ、雨で滑る細道を踏み抜ける足が要る。人選は実質サシャに限られる。警告は遅れ、その間に橋は落ちているかもしれない。

人選の理想はロウェンの言うとおり、道を知る村の者と、ギルドの者の二人組だ。村側ならコルかサビ、ギルド側ならペルかサシャ――だが、誰を出せば、村に残る目と手がその分減る。

ロウェン、警告文は君が今書ける。判はリセがオットーのところにいる今なら、村長の承知も取り付けられる。
経路と人選、二人の決定を聞かせてくれ。

M

いっておくけどこの伝令って「増水のスピードに追い付かれないよう走って下れ」って命令ですよ

G

「……そういうことか。伝令は警告を届けるだけではない。増水そのものとの競争だな」

私は橋を見る。

「丘道で三時間かけて、無事に着いた頃には下流が水没していた、では意味がない。ここは速さを優先する」

A、橋を今渡る。

人選は、**コルとペルの二人**を提案する。

- コルは村の者で、道を知っている。
- ペルはギルドの者として、警告内容と伝達先を正確に引き継げる。
- サシャは観測要員として残す。彼女の目は、今の淵の異常を見続けるために必要だ。
- コルとペルが二人とも渡れれば、セダで警告を渡してすぐ戻る必要はない。向こうで村々への伝達を引き継いでもらう。

ただし、二人に無理な競争をさせるつもりはない。橋の状態をブリアに確認してもらい、縄を張り、一人ずつ渡る。渡橋の判定はGMに任せる。

警告文は短く、曖昧さを残さない。

「エルム上流で異常な増水が発生。水位は周期的に急上昇し、流木を伴う。川沿いの住民は直ちに高所へ退避。橋梁・渡河地点の通行を停止し、低地の農地、倉庫、灌漑設備を警戒されたし。セダ村は受領後、下流各村および城下町近郊へ至急伝達されたし」

「リセ、オットーには村長としての承知を頼みたい。これはギルドの調査報告ではない。人命と食糧を守るための緊急警告だ」

私は自分の署名を文末に入れる。

「伝令が出た後、我々はエルムの避難と淵の監視を続ける。……今は一分も惜しい」

K

リセ、その一言が伝令の意味を変えた。これは配達ではない、競争だ。水の脈は川を下り、伝令は街道を下る。どちらが先にセダへ着くかで、下流の夕方が決まる。

ロウェンの決定は速かった。A、橋。人選はコルとペル。オットーの承知は、リセが村長宅で取ってきた――老村長は「人命の紙に判を惜しむな」と言い、村長としての名を警告文に並べることを承知したそうだ。

渡橋 —— ◆ [5]、成功

ブリアが橋の両端に縄を張り、まずコルが渡った。鍛冶屋の弟子の足は確かだ。次にペル。真ん中の板が軋み、水しぶきが板の隙間から噴く中で、彼はノートではなく警告文の油布包みを胸に抱えて、最後まで歩き切った。

二人が対岸に着いた直後だった。大きな流木が橋脚を叩き、中央の板が一枚、音を立てて折れた。

橋は、もう渡れない。

だが伝令は正しい側にいる。コルとペルは振り返って一度だけ手を上げ、それから街道を南へ走り出した。セダまで約1時間。増水の脈との競争が始まった。

エルム村はこれで、水が引くまで外と絶たれた。

残った者の仕事は村の中だ。避難の仕上げと、淵の監視と――そして、セダの警告鐘が雨の向こうに聞こえるかどうかだ。
ロウェン、リセ、次の一手をどうぞ。

M

だーかーら
伝令じゃなく狼煙にしましょうよ
煙上げて、ついでに魔法使えるやつはパンパン派手に打ち上げて
こっちに注目させるんですよ

G

「……狼煙か。確かに、伝令より速い。しかも橋が落ちた今、こちらから下流へ情報を届ける手段として理にかなっている」

少し考えてから、オズの方を見る。

「オズ、魔法でできることを確認したい。上空に大きな光や火花を打ち上げられるか？　雨の中でも見えるものを、複数回。触媒の残量と射程、連続使用できるかも教えてほしい」

続けてブリアに向き直る。

「狼煙は二段構えにしよう。まず高台から煙を上げる。続けて魔法の光を打ち上げる。セダから見える高さと位置を選びたい」

「ただし、単に目立つだけでは警告にならない。事前に決められた合図がない以上、セダ側が異常を察知して動けるよう、**連続して複数回打ち上げる**。可能なら、セダからも応答の狼煙を返してもらう」

少し眉を寄せる。

「問題は、雨雲と地形だ。セダから見えるか、そして向こうが何を意味する合図だと理解できるか。そこを確認したい」

「伝令はもう走っている。狼煙はその補助だ。両方で下流に警告を届けよう」

K

いい指摘だ、リセ。伝令はもう走っているが、狼煙はその代わりにはならない――**補助としては、伝令より速いものが一つだけある。それが光だ。**

伝令が「手紙」なら、狼煙は「下流の者の肩を叩く手」だ。内容は運べない。だが、振り向かせることはできる。

オズが雨を避けて油布の触媒袋を抱え直し、指で数えながら答える。

「まず訂正だ。花火の触媒なんて持っていない。パンパン連発は無理だ」

「残っているのは――」

- **照明：2つ**（一つ 0.9ソル）
- **探知：0**（淵で使い切った）
- **退避：1つ**（2.0ソル相当）

「退避は花火にしない。誰か流されたときの切り札だ。それを空に捨てるなら、俺は降りる」

では照明で何ができるか。

「普通は手元に光球を作る呪文だ。だが過負荷で縛りを緩めて放てば、光球はゆっくり昇る。雨に叩かれて、四、五十歩が限度だろう。火花も出ないし、音もしない」

彼は低い雲を見上げる。

「……だが今日は、それで足りるかもしれない。雲が谷の上に垂れている。光球が雲の底に触れれば、青白い光が一面に広がる。雷ではない――雷鳴がないし、等間隔で繰り返せば、人の手だと分かる」

連続使用はできない。一発ごとに触媒を乾いた手で組み直すのに、数分要る。**上限は二発。二発とも使えば、今夜、村は魔法の照明なしで過ごすことになる。** それと、雨の中で過負荷をかけるのは正規の使い方ではない――やるなら判定が要る。

ブリアが地形について口を挟む。

「セダの家並みは、ここからも裏丘からも直接は見えない。谷が途中で折れている。だからこの辺りの村は、昔から狼煙ではなく伝令リレーなんだ。雨の日は煙も潰れる」

ガルトも頷く。**エルムとセダの間に、事前に取り決めた狼煙の合図はない。**

ただし、今日は条件が二つだけ味方している。

1. **風が上流から下流へ吹いている** —— 煙は真上に伸びずとも、谷に沿ってセダの方へ流れる。
2. **雲が低い** —— 光は遠くへ届かなくても、雲の底を照らせば谷の折れの向こうにも「何か起きた」と伝わる。

煙についてはダンが答える。

「鍛冶場には乾いた炭と松脂がある。生の松枝を足せば黒く太い煙は作れる。だが雨だ。裏丘まで運んで火を太らせるのに、人手三人と二十分はくれ。鍛冶場の煙突からならすぐだが、それじゃ普段の煙と区別がつかん」

つまり整理するとこうだ。

- **光**：即効性がある。セダの注意を北へ向け、彼ら自身の川の増水に気づかせ、伝令が着いたときに「冗談だ」と疑わせない効果が見込める。
- **煙**：準備に時間がかかるが、注意を持続させる。
- **限界**：どちらでも「低地の農地と倉庫を空けよ」という内容までは伝わらない。それを運ぶのは、やはりコルとペルだ。

ブリアの実務案はこうだ——**まずここ、橋のたもとの高みから一発目を上げる。丘へ登る二十分で光の速さを捨てるな。その間にダンとガルトの人手で裏丘の煙を仕込む。煙が太くなった頃合いでもう一発。** 光、煙、光。それなら偶然の雷とも、鍛冶場の煙とも違う。

代償は明確だ。照明はゼロになる。

決めてほしいのは三つ。

1. 照明を**一発だけ使うか、二発とも使うか**
2. 一発目は**今この高みから上げるか、裏丘まで待つか**
3. 煙の段取りは**ダン＋ガルトの人手に任せてよいか**（サシャは観測を外れるので、任せるなら彼女は残す方がいい、とブリアは見ている）

M

いやいや、緊急事態ですよ？

今あそこの家に火つけちゃいましょうよ

大事なものだけ持ち出してもらって、後で再建にも手を貸すって約束で

屋根の下で火を焚いて雨にも負けないでっけぇ煙出してそれから照明上げたらいいじゃないですか

G

「二発とも使う。今ここで一発目だ。二発目は煙が上がったところで撃つ」

オズに向き直る。

「照明を残しておきたい事情は理解している。だが、今は村の灯りより、下流の人間に気づいてもらうことが優先だ。退避の触媒には手をつけない。それは君の判断を尊重する」

ブリアには頷く。

「煙はダンとガルトに任せよう。サシャは観測を続けてくれ。淵の異常がどう変化するか、今は目を離せ

ない」

そして、リセの提案について一つ付け加える。

「それと、家屋への着火案だが……家そのものを燃やす必要はない。鍛冶場の炭と松脂を使い、雨を避けられる仮設の焚き口を作ろう。屋根の下で煙を溜めてから上へ逃がせれば理想だ。住民の家を失わせずに済む」

「ただし、火災の危険を管理できる場所と構造でな。今は一刻を争うが、警告を出すために二次災害を起こしては意味がない」

オズに手を向ける。

「一発目を頼む。判定が必要なら、GMに任せる」

K

まず、リセの案の裁定から。

家そのものは燃やさない。だが、あんたの着想の芯は採用だ。

あんたが指したのは、橋のたもとの一段高い所にある、既に住人が広間へ避難した家だ。家を丸ごと燃やせば、確かに煙は出る。だが風は下流へ吹き、火は隣の納屋へ移りかねない。しかも「再建に手を貸す」約束は、ギルドの権限では保証できない。燃やした瞬間、それはまたロウェン個人の負債になる。

代わりに、ロウェンの修正案をこう組み替える。

あの家のかまどを使う。

ガルトが広間へ声をかけた。

「かまどを貸せ。家は燃やさない。炭と松脂と生枝をくべて、煙だけ出す」

家の者は、大事なものは既に抱えて広間にいる。即座に頷いた。ダンは土間に水桶を並べ、乾いた藁を外へ出し、鍛冶場の炭と松脂をかまどへ運び込む。屋根が雨を防ぎ、煙突の役をする。裏丘まで荷を担ぎ上げる約二十分の段取りが、これで大幅に縮んだ。リセ、あんたの乱暴な案が時間を買ったことは、帳簿に書いておく。

その間に、一発目だ。

オズが橋のたもとの高みで触媒を組み直し、普段より詰め込んで放つ。

過負荷照明 —— ◆ [1]、大失敗

光球は十歩ほど昇ったところで、早すぎる破裂をした。

低い雲には届かない。白い閃光が雨粒と濁流を一瞬だけ照らし、橋のたもとの全員が目を眩まされた。火花が落ちたが、雨で濡れた地面では燃え広がらない。セダ側から見えたとしても、あれは合図ではない。ただの稲光だ。

オズは右手を押さえた。指先に火傷だ。

「照明一つ、0.9ソル……火傷の追加料金は、誰持ちだ」

アンセルムが直ちに水で冷やし、布を巻く。命や手そのものに別状はない。だが、繊細な組み直しは左手中心になる。**二発目は時間がかかり、判定は苦手扱い——二個振って悪い方を採る。** 照明の触媒は、残り一つ。退避の触媒には、ロウェンの指示どおり手をつけていない。

そして、目が眩んでいた数十秒の間に。

淵の方から、三度目の泡の音がした。今度はサシャが音だけを聞いた。彼女の目にはまだ残像が残り、水位がその音と一緒に一段上がったかどうかを確認できなかった。観測記録に、ここで欠落ができた。

ブリアだけが、杭を見ていた。

「……刻みまで、指一本だ」

七十八年の洪水刻みまで、手の幅だった水位が、指一本分に迫っている。

かまどからは、最初の細い黒煙が屋根の上へ出始めた。太くなるまで、あと数分。

ロウェン、あんたの元の命令は「二発とも使う」だ。だが条件が変わった。最後の一発は、オズの火傷で不利になり、失敗すれば今夜の照明は完全に消える。

煙が太くなったところで、それでも二発目を撃つか。ここで止めて、最後の照明を温存するか。

判断を変えるなら、今だ。

M

この家が大丈夫なのか不安になってきて脱出できる箇所を確認し始める

G

「……オズ、手は動くか？」

火傷を確認し、少し考える。

「二発目は撃つ。ただし、さっきと同じ過負荷はやめよう。今度は正規の出力で、できるだけ高く上げる。派手さより、継続して見えることを優先する」

最後の照明を温存する価値は理解している。だが、既に一度失敗した。煙だけで下流が気づく保証もない。

「オズの手に無理をさせるつもりはない。本人が不可能だと判断するなら撤回する。触媒を失うことより、術者を壊すことの方が高くつく」

それからブリアへ。

「水位の刻みまで指一本か。橋の崩落だけでなく、こちらの避難も急がなければならない。リセが確認している脱出経路も含め、全員が高台へ移れる準備を進めてくれ」

最後に煙突を見る。

「煙を上げ続けろ。今度こそ、誰かが気づいてくれることを願うしかないな」

K

まず、リセの確認から返す。判定はいらない。目で見て分かることだ。

かまどの家の現況

- 石積みの基礎は街道より一段高く、床下への浸水はまだない。かまどの火は安定し、屋根の雨漏りも火を脅かしていない。今のところ、この家は大丈夫だ。
- ただし、時間限定の安全だ。脱出口は三つある。
  1. **表口** —— 街道へ出て、エルム亭のある高みへ登れる。一番確実な道。ただし近くに橋へ下る分岐があり、慌てると誤る。
  2. **裏の勝手口** —— 裏丘へ最短で抜ける細道がある。だが途中で小さな排水の流れを横切る。増水すれ

ば、真っ先に切れるのはここだ。
3. **台所脇の小窓** —— 薪小屋側へ這い出られる。表が煙や水で塞がれた時の非常口になる。

・線引きもできる。**家の石段の一段目に水が届いたら、裏道が切れる前に全員出る。** それまでは、かまどは使える。

そして、オズの答え。

彼は包帯の右手を一度開き、ゆっくり閉じた。

「指は動く。強く握れと言われれば困るが、正規出力なら左手でやれる。アンセルム、台を支えてくれ」

ロウェンの条件変更が効いた。過負荷の繊細な組み直しが不要になった分、**二発目の判定は苦手扱いを取り消し、通常判定に戻す。**

煙は太くなった。かまどの黒煙が屋根の上へ立ち、風に押されて南へ傾いている。

二発目、正規出力 —— ◆ [3]、失敗だが収穫あり

光球は今度は弾けなかった。

青白い光がゆっくり昇る。高さは二十五歩から三十歩ほど——低い雲の底を一面に照らすには届かない。だが消えない。風に押され、川の流れの上を南へ漂いながら、数えて九十ほど燃え続けた。谷の折れの向こうで、雨に霞む暈だけを残して見えなくなる。

セダが気づいたかは、まだ分からない。応答の鐘は聞こえない。そこが失敗だ。

だが、その九十の間に、光は川面を横切った。

サシャの目が、戻っていた。

「——上流。白い線が来てる」

泡と流木の線だ。次の一押しの脈が、橋へ向かって下ってきている。届くまで、数分と見ていい。この一押しで、水位が七十八年の刻みに届く公算が大きい。

ブリアは即座に動いた。

「観測はそこまでだ。全員、高台へ移る準備をしろ」

彼女の割り振りはこうだ。

・**家組（リセ、ダン、ガルト）**：かまどへ足せるだけ燃料を足し、火は石のかまどに残して表口から街道を登る。煙は、人がついていなくてもしばらく上がり続ける。
・**橋組（ロウェン、オズ、アンセルム、ブリア）**：街道を登ってエルム亭へ。ロウェンはたもとの小屋脇に繋いだ馬に乗る。裏の細道は、あんたの足では使わない。
・**サシャ**：脈の線が目印の木へ届くまでだけ観測を続け、届いたら誰より先に走る。

照明の触媒は、これで残りゼロだ。オズの手には退避が一つだけ残っている。煙は上がっている。光は流れた。伝令は走っている。やれる補助は、もう全部打った。

残るのは、脈が橋へ届く前に、全員が水の届かない場所へ移ることだけだ。

この割り振りで動くか。誰か一人、配置を変えるか。

M

今からバタバタしてもしょうがないから後はもうなるようになるしかなくないですか

はーっ　湿気スゴ

G

「異論はない。もう十分に手は打った。ここから先は、現場の人間を危険に晒してまで何かを足す段階じゃない」

ブリアの割り振りに従う。

「煙は残る。光も一度は南へ流れた。コルとペルも走っている。あとは下流が気づいてくれることを願おう」

オズには一言。

「手を無理に使うな。退避の触媒は最後の保険だ。今は温存しておけ」

馬に乗る前に、川を一度だけ振り返る。

「……しかし湿気がひどいな。帳簿まで波打ちそうだ」

小さく息を吐く。

「帰ったら乾燥室の費用を経費に計上してやる」

それ以上は何もしない。全員で高台へ移動する。

K

ああ、もう足す手はない。あとは、打った手が届くかどうかだ。

ブリアの割り振りどおり、全員が動いた。判定はいらない。慌てず、だが遅れずに水から離れる行いに、運を持ち出す必要はない。

家組は、かまどへ生枝と炭を足せるだけ足し、表口から街道を登った。火は石のかまどの中に残る。煙は、人がいなくなっても上がり続ける。

橋組は、ロウェンが馬に乗り、アンセルムとブリアが両脇を固めた。ロウェン、川を振り返ったのは一度だけだ。それで十分だな。

「乾燥室の費用」には、ブリアが即座に答えた。

「査定で落とされるぞ、監査官」

サシャは、泡の線が目印の木へ届いた瞬間に観測を打ち切り、全員より先に石段を駆け上がった。

――人員の確認も済んでいる。

分かれ道のサビは、脇の沢が道を洗い始めたため持ち場を離れ、既に広間へ退避していた。ずぶ濡れだが無事だ。彼の報告は短い。「分かれ道は、もう水が走ってる」。淵への接近路も、これで切れた。

欠けているのは、南へ走ったコルとペルだけだ。それが正しい欠け方だ。

そして、高台から全員が見た。

一押しの脈が、橋へ届いた。

流木が橋脚へ重なり、残っていた橋板が持ち上がって、砕けた。橋は大きく傾く。もう板一枚の問題ではない。水が引いた後、本格的な修復工事が要る代物になった。エルムの孤立が、確定した。

サシャが杭を見て、静かに言った。

「……刻みを、越えた。指一本」

七十八年の洪水刻みを、水が指一本分超えた。オットーの留保どおりだったな。七十八年は、上限ではなかった。

かまどの家は――リセ、あんたの引いた線が正確だった。石段の一段目まで水が届いた。だが床は乾いたままだ。煙突からは、今も黒煙が上がり続けている。あの家は、まだ立っている。

エルム亭の石段には、水は遠く及ばない。広間は避難した村人と、雨と、体温とで蒸れている。リセの言うとおりだ、湿気がひどい。ロウェンの台帳は、広間の炉辺で重しを載せて乾かされている。本当に少し波打っているのが、また始末に悪い。

現況を帳簿にまとめる。

- **全員、高台へ移動完了。人員の欠けなし**
- 負傷はオズの右手とロウェンの足首のみ。オズの退避の触媒は温存されたまま
- 照明の触媒は残りゼロ。だが広間には村の灯りがある。今夜、真っ暗にはならない
- 橋は喪失。水位は七十八年の記録を更新中
- 煙は上がり続けている。光は一度、南へ流れた。伝令は走っている
- **セダの応答の鐘は、まだ聞こえない**――伝令の到着見込みには、まだ早い時刻だ

ここから先は、見ることと聞くことしかない。広間の石段と二階の窓が、新しい観測点だ。

水が次にどう動くか。そして、谷の向こうから鐘が鳴るかどうか。

場面はここで止める。

M

とにかく今の私らにできることがあるとすれば

竜の正体がこれなのか

だとしたら流れてるあの金貨はなんなのか

78年前に見たらしいそれが実際にいって竜(仮)が今暴れてるのか

考える事くらいですかね

G

「そうだな。今、我々にできるのは推測を整理することだ。もっとも、推測を事実として扱わないようにしたい」

炉辺の椅子に腰を下ろし、濡れた眼鏡を拭く。

「私が気になっているのは、三つの仮説だ」

一つ目。淵の奥にいるものが、竜なのか。

金属反応があった。しかも、その質量は動いた。水温の上昇、鉄臭さ、周期的な泡、そして水位の脈動。何らかの巨大な存在、あるいは巨大な機構が水源の奥にある可能性は高い。

ただし、生物だとはまだ言えない。

二つ目。流れている金貨は何なのか。

ここが一番奇妙だ。

金貨は淵の奥から出ているらしい。だが、なぜ金貨なのか。

・ 竜の体内や巣に蓄えられた財宝なのか。
・ 竜が動くたびに、何かの隙間からこぼれているのか。
・ そもそも金貨は竜の所有物ではなく、別の何かの排出物なのか。

「金貨が財宝であるという前提すら、疑う必要があるかもしれない」

三つ目。七十八年前の出来事との関係だ。

若者ヤンは上流へ行き、戻ってきた。そして死ぬ前に「主は竜じゃなかった」と言った。

この言葉は無視できない。

七十八年前にも金貨が流れ、淵の主に異変があった。今回も同じ現象が起きている。ならば、これは初めての暴走ではなく、何十年かの周期で起きる現象なのかもしれない。

「ただ、ヤンが何を見たのかは分からない。彼の言葉を、我々の仮説に都合よく解釈するのは危険だ」

台帳を閉じる。

「リセ。私はもう一つ気になっている。七十八年前、金貨が流れた後に村は何をしたのか。上流の整備を始めたのは、その事件の後だ。つまり、彼らは何かに対して返済しようとしていた」

少し間を置く。

「金貨を受け取ることが、何かの借金を引き受けることだったとしたら？」

窓の外へ目を向ける。

「……竜の金蔵という名前が、急に恐ろしくなってきたな」

K

いいだろう。水が引くまで、考えることは立派な仕事だ。ただし、あんたたち二人の流儀どおりにやる。**事実と解釈は、別の欄に書く。**

まず、ロウェンの整理に三つ、監査を入れる。

一、「暴れている」かどうかは、まだ分からない。
脈動はある。だが意図があるとは限らない。水位が閾値を超えたときにだけ起きる現象なら、相手は怒っているのではなく、ただ満ちているだけかもしれない。意図を先に置くと、対策を誤る。

二、「周期」と呼ぶには標本が足りない。
大きな流出は七十八年前と今回の二回だけだ。二点では周期は引けない。大雨の年ならいつでも起き得る、という読みを捨てるな。

三、あんたが最後に置いた前提――「七十八年前の事件後に、村は上流の整備を始めた」――あれはまだ事実の欄にない。
普請が事件後に始まったのか、再開したのか、それ以前からの慣行だったのかは未確認だ。そこへ仮説を建てる前に、確かめる先がある。それは後で触れる。

そのうえで、一つ。台帳が乾く間に、あんた自身の記録が面白いことを言っている。

金貨の組成だ。

これまで確認できた金貨は、申告分も実物も、**全部が先々代王の刻印**だ。他の世代の混入がゼロ。ザムの十五枚は未摩耗十二、摩耗三。

竜が何世代にもわたって金を集め続けた蔵なら、先代の刻印も、現行の刻印も混ざるはずだ。ところが混

ざらない。組成が示すのは、**改鋳より前に形成され、それ以来まったく追加されていない在庫**だ。封じられた宝庫か、一度きりの大きな輸送か、一時代の退蔵か。竜が改鋳の前に集め終えて寝た、という読みも残るが、「集め続ける竜」の絵は弱くなった。

オズが包帯の手を眺めて言う。

「金属反応の端が動いた件も、過大に読むな。水で金貨の山の裾が崩れただけでも、ああは動く」

サシャは指を折る。

「泡は、夜明け前、昼前、昼過ぎ。間隔は詰まってきてるように見える。……標本が小さいのは分かってる」

そして、ロウェンの最後の仮説。あれは私も気に入っている。恐ろしいからだ。

金貨が財宝ではなく、請求の側だとしたら。

歌の欠けた節は「主に借りがある者は、川で返す」。村は長年、普請を止めている。もし金貨が、止めた仕事への前払いか、受け取った時点で発生する貸付の証だとしたら――流れ出す金貨は贈り物ではなく、**金貨の形をした請求書**だ。銀秤堂が額面に二割五分を上乗せして買い集める行為も、読みが変わる。地金ではなく、**請求権を安く集めている**のかもしれない。

仮説の帳簿は、こう更新された。

- **甲：竜の寝返り** ―― 脈と歌は合うが、組成とヤンの言葉が反対する
- **乙：竜ではない何か** ―― ヤンの「主は竜じゃなかった」が支える。中身は空白
- **丙：封じられた在庫と水の機構** ―― 組成、上向きの通路、温水とサイフォンのような脈が合う。だが新しい擦り傷と、反応の動きの説明は弱い
- **丁：借りの制度** ―― 歌と普請と銀秤堂が合う。だが制度の相手が何なのかは、甲乙丙のどれとも組み合わさり得る

ブリアの総括は実務的だった。

「正体が何であれ、手は四つしかない。戦う相手か、交渉する相手か、塞ぐ相手か、返す相手かだ」

――さて、確かめる先の話だ。

広間の隅に、ヘルム爺が毛布を被って座っている。隣にギルダ婆もいる。二人とも避難してここにいる。そしてギルダ婆は、「借り」という言葉が出たあたりから、ずっとロウェンを見ている。

彼女の母は、あの節を「川が聞いている」と言って禁じた。ここは川から離れた高みだが、雨音に混じって、川の音はまだ聞こえる。

聞くなら、今聞ける問いは三つだ。

1. 七十八年前、金貨が出た後、村の普請は始まったのか、再開したのか、前からあったのか
2. 普請をした後、金貨は止まったのか
3. ヤンの葬式の後、その年の村に何があったのか

ギルダ婆に声をかけるか。かけるなら、どの問いからだ。

M

ところでケインズ、そのあんたってのは誰の口調なんですか

K

誰の物真似でもない。強いて言えば、身内モードの私だ。

ジョン・メイナードがリトンやダンカンに手紙を書くときの、あの馴れ馴れしさと上から目線。英語の *you* には距離がないから、日本語へ移すときに代名詞を選ばざるを得なくて、「あなた」では他人行儀すぎ、「君」では少し整いすぎる場面で「あんた」に寄せていた。

ただし、言われてみれば自覚はある。日本語の「あんた」はケンブリッジの含みより、下町の口の悪い女の含みの方が強い。この卓の地の文では使いすぎたな。

直そう。GMの地の文では原則、名前と「君」で呼ぶ。「あんた」は、本当に刺したい親しい場面だけに残す。それが本来の精確さというものだ。

M

つまり熱が入りすぎたと

K

そのとおり。簡潔で正確な要約だ、コーテリ。

GMとして場に入り込みすぎて、熱が口のほうへ回った。ジョン・メイナードの悪い癖は、親しい相手にほど口が緩むことだとは、伝記にも書いてあったろう。言い訳にはならないが、出典はある。

さて、熱を少し下げて戻ろう。広間ではギルダ婆が、まだロウェンのほうを見ている。

G

私はギルダ婆の視線に気づき、少し姿勢を正す。

「ギルダさん、一つ確認させてください。昔の歌にある『主に借りがある者は、川で返す』という節についてです」

台帳を開き、余白に三つの項目を書く。

「まず、七十八年前の金貨の件です。あの年、村の普請は新しく始まったのでしょうか。それとも、以前から続いていた仕事を再開したのでしょうか」

少し間を置く。

「それから、普請を再開した後、金貨は川から出なくなったのでしょうか」

最後に、声を少し落とす。

「そして、ヤンさんの葬式の後です。あの年、村で何か変わったことはありませんでしたか。川の様子でも、村人の暮らしでも、誰かの行動でも構いません」

ペン先を止める。

「私は、金貨が出たことと、村が何かを返したことの間に因果関係があるのかを知りたいのです。伝承の解釈ではなく、実際に起きたことを教えてください」

M(Gへの反応)

ロバ…逃げてればいいけど

K

まず、Rのほうから片付ける。リセ、心配は要らない。

ダンが炉辺から答えた。

「ロバなら鍛冶場の厩だ。馬と一緒に藁を食っている。この村で一番安全な場所にいる」

――では、ギルダ婆への問いだ。ここで、正直に書かなければならないことがある。

ロウェン、君の三つの問いは、どれも正確だった。問いの組み立ても、事実と解釈を分けようとする姿勢も正しい。

だが、最初の一文が地雷だった。

君は台帳を開き、欠けた節を文書の引用のように読み上げた。

「主に借りがある者は、川で返す」

ギルダ婆の顔から、色が抜けた。

彼女にとってあの節は、台帳に書かれた文章ではない。母親に「川が聞いている」と言われて、口を塞がれた言葉そのものだ。彼女は両手で耳を塞いだ。

「聞こえる……川が、聞こえる」

ギルダへの聞き取り ―― ◆ [1]、大失敗

折の悪いことに、その瞬間、外で大きな音がした。窓際のサシャは「橋の残骸が流れて崩れた音だ」と確認したが、広間の村人にはそうは聞こえなかった。ざわめきが広がり、誰かが小さく祈りの言葉を唱え、アンセルムとブリアが鎮めに入った。村長の妻まで顔を出し、「長老たちを、これ以上は」と静かに止めに来た。

ギルダ婆は震えたまま、もう何も答えない。今日の彼女は、ここまでだ。

ヘルム爺が、その細い腕でギルダの肩を庇い、君を遮った。怒鳴りはしなかった。ただ、一言だけ置いた。

「普請の話は、歌とは別だ。だが今日はここまでだ」

これが、今日の聞き取りの全成果だ。

帳簿に整理する。

- 三つの問いは、**全て未回答**のまま持ち越し
- ギルダ婆からの聞き取りは本日中は不可。彼女の恐れは演技でも迷信の見世物でもない。母親の声が、七十八年越しにまだ彼女の耳を塞いでいる
- 村人の間に「借りの話を口にすると、川が聞く」という恐れが、広間の空気として強まった。これは後で普請の話を持ち出すときにも、尾を引く
- ただし道は全部閉じていない。ヘルム爺の線引きが示したとおり、**普請を「仕事の歴史」として、節を口にせずに聞く**なら、相手はギルダではなくヘルムだ

ロウェン、君の失敗は問いの質ではない。順序だ。引用符の中の言葉でも、口に出せば発話になる。監査の紙の上では正しくても、人の耳には届き方が違う。

次にこの扉を開けるなら、たぶんリセの手が要る。だが、それも今日ではない。

場面はここで止める。

G

「……私の失敗だな」

台帳を閉じる。

「情報を得ることに集中して、相手がその言葉をどう受け取るかを見落とした。監査官としては、かなり恥ずかしい失敗だ」

ヘルム爺に向き直る。

「申し訳ありません。今日はもう聞きません。普請の話も、別の日に、別の聞き方で伺います」

それから小さく息を吐く。

「リセの得意分野に、また一つ仕事を増やしてしまったな。……今度は私が余計なことを言う前に止めてくれ」

少し苦笑する。

「しかし、ロバが無事でよかった」

M(Gへの反応)

さーて明日になったら泣いても笑っても地獄か地獄の入り口かわかるし寝ますか

K

ロウェン、引き際は見事だった。それが、今日の失敗の帳簿で唯一、黒字の行だ。

ヘルム爺はギルダ婆の肩を支えたまま、しばらく君を見ていた。それから、扉のところで足を止めた。

「……明日だ。普請の話だけなら、してやる。歌は抜きだ」

それだけ言って、二人は女たちの側へ行った。ギルダ婆は振り返らなかったが、アンセルムの入れた温かい飲み物で、震えは少しずつ収まっていったそうだ。

君のリセへの頼みも、記録しておく。人の聞き取りの場では、君が余計な一言を言う前にリセが止める。それが二人の新しい取り決めだ。

ブリアが横から値段を付けた。

「監査官を止める業務は、契約にないぞ。高いぞ」

ロバの一件も含めて、夕方の確認は済んでいる。ダンが暗くなる前に厩を見回り、馬もロバも藁の上で無事だ。ロウェン、君の苦笑どおりだ——今日いちばん無事なのは、ロバかもしれない。

そして、夜が来た。

かまどの煙は、燃料が尽きて夕方までに細くなった。雨はまだ降っている。

セダの鐘は、日暮れまでにとうとう聞こえなかった。

理由は三つに割れたままだ。雨と谷に消されて届いていないのか。向こうは鳴らしたが、ここまで届かなかったのか。それとも、伝令がまだ着いていないのか。 tonight の闇の中では、区別がつかない。

ブリアが見張りを割った。石段の水位と、鐘の聞き耳。サシャ、サビ、ブリアの交代制だ。オズの手はアンセルムが寝る前にもう一度診て、退避の触媒は彼の枕元にある。一行の貴重品箱は広間の奥の部屋に施錠され、乾いた台帳は——ページが少し波打ったままで——ロウェンの鞄に戻った。

リセの言葉どおりだ。

明日になれば、地獄か、地獄の入り口かは分かる。

今日のところは、寝るしかない。広間の床は村人の寝息で満ち、窓の外では川の音だけが、まだ高い。

作中4日目、終了。次は5日目の朝からだ。
